

おしつけがましくない芸術・その3
—その概念を見つけ出すことは可能か—
Anonymous Art #3
—Is it Possible to Find "Non-Intrusive Art"?—

山貝征典¹ 赤松さやか²
YAMAGAI Masanori¹, AKAMATSU Sayaka²

Abstract

In this research, we put into practice whether it is possible to create " Non-Intrusive Art " in fields such as art management, curation, and contemporary art expression. Through these efforts, we are considering whether it is possible to find an idea or concept of " Non-Intrusive Art ". We considered the actual implementation of exhibitions and their efforts, as well as the anonymity and personal motives that arise from art activities and expressions.

キーワード：アノニマス，軽芸術，おしつけがましい，他力，シュルレアリスム

Keywords: anonymous, kei-geijutsu, intrusive, other power, surrealism

1. はじめに

本研究ではアート・マネジメントやキュレーションの分野，芸術活動の過程や行為において「おしつけがましくない芸術」という見立てが可能かを，アート・プロジェクトやギャラリー運営を通じて実践し，その周辺に位置する事項を絡めながら考察するものである。芸術がその特徴として持つ力や意味を，軽・個・B級・おしつけがましい／おしつけがましくないなどのキーワードとともに，2名の研究者が取り組んでいる芸術と社会との関わりを見つめる方法，制作者と受容者間のすれ違いを確認する試みなどを検証しながら論じていく。山貝は軽芸術考察に基づく展覧会における実践研究と，本活動から見えてくる芸術におけるおしつけがましさとメタ思考と芸術鑑賞方法について考察した。赤松は運営するギャラリーの取り組みであるローリング市場のコンセプトやその概念，おしつけがましくない芸術の性質としての他力性を，シュルレアリスムや民藝，ジャン・デュビュッフエや社会彫刻などに言及しながら考察した。本論では研究「その1」「その2」から続くまとめとして，おしつけがましくない芸術とはどのようなものなのか，その概念を捉えることができるかを一旦収斂させながら考察を行っていく。

2. おしつけがましさと軽芸術

2.1 メタすぎない芸術体験へのあこがれ

¹ 清泉女学院大学

² アノニム・ギャラリー

とある表象された芸術を鑑賞・体験する際に、その受容者が我を忘れるほどの感動や興奮をし、号泣や卒倒が起こることがある。特にパフォーマンス系の催しのライブやコンサート会場において、失神者が出る事例も見られる¹。没頭しまわりが見えなくなるほど、また叫びながら己を見失うほどの快感や感動が得られることは、鑑賞者にとってこの上ない喜びかもしれない。芸術表象がもつ力はそれほどの脅威と危険な働きを含むことがある。ライブ会場での失神事象の要因は感動や喜び以外にも、参加者間の同調意識、照度が落ちた密閉環境下での酸素濃度低下、参加者自身のコンディションや精神状態とも関係することが知られている²。また発表者側からしても、この事象により伝説を生みさらに熱心なファンを獲得できカリスマ性がアップし、関連コンテンツの売り上げ増などにもつながる。

一方何かしらの芸術を鑑賞する際にむやみに失神・卒倒せず、メタ思考的な客観性を習得してしまう体や心になってしまうと、爆発的にその表現を受容することは難しくなる。社会性を求められる業務や交渉、ビジネスの場では重要とされる客観的な態度は、没頭し我を忘れるように芸術を体験する上ではじゃまになることもある。まさにこのような論文・論考をえらそうに書きつけている時点で、失神できる可能性は著しく低くなっていくだろう。

2.2 「さびおま」にみるフィクションの入れ子構造

「淋しいのはお前だけじゃない³（以下「さびおま）」は1982年に制作・放映された、大衆演劇の世界を題材としたTBS系列のテレビドラマである。市川森一脚本、西田敏行主演で制作され、バブル好景気の裏に浮き上がったサラ金⁴問題と、当時衰退していた大衆演劇⁵の世界をおり混ぜて表現し、下町の玉三郎こと梅沢富美男というスターも生み出した。このドラマによって、当時娯楽としてはあまり注目されなくなっていた大衆演劇は一定程度息を吹き返したという。自らその業界に弟子入りし内部に入り込んだフィールドワークを実践した社会学者の鶴飼正樹は、この現象を「皮肉なことに、テレビによって衰退した大衆演劇は、テレビによってブームとなった⁶」と指摘している。

創作としての芝居や戯曲、ドラマや映画などはそれ自体が虚構で、基本的にはフィクションとして構築される。さらにドキュメンタリーのスタイルを取る映画や記録でさえ、その編集や演出に頼るつくりものでもある⁷。このような芝居やドラマなどのコンテンツの中でも、大衆演劇が持つ個性と構造はさらに異質だ。まさに「歌は世につれ世は歌につれ」を地で行く世界感と、娯楽性に振り切った観客との近さを持っている。

この「さびおま」では大衆演劇の仕組みを利用しながら、劇中劇がふんだんに展開される⁸。進行する主題が大衆演劇ということを利用して効果的に利用する演出である。ドラマの終盤で、追い込まれた一座が借金取りを続ける大ボス国分への復讐を計画する場面で、梅沢が演じる市太郎が問いかけ西田演じる熊吉（沼田）が切り返すセリフは、この入れ子構造を利用したクライマックスでもある。「熊ちゃん、国分を殺るって？何でやるのよ。ドスカい、はじきかい？」「ドスもはじきも要らねえよ。芝居で殺すのよ⁹」



図1 「淋しいのはお前だけじゃない」 CS 放送・TBS チャンネル，
アーカイブ番組紹介ページより <https://www.tbs.co.jp/tbs-ch/item/d0054/>

図2 画中画の一例，Jan Vermeer van Delft - Lady Standing at a Virginal
National Gallery, London-www.nationalgallery.org.uk : Home : Info
(パブリック・ドメイン)

2.3 様々な「さびおま」的要素

芸術鑑賞の際にどの程度我を忘れて没頭できるか、あるいはどのくらいのめりこまずにメタ的に見ることができるとの差異は、軽芸術研究では注視したい事象である。何でもすぐに劇中劇／画中画的に見守ってしまうことに対する自己反省や、斜に構えることへの葛藤と、一方では楽しみもある。「さびおま」の世界をつくり出した元素材である大衆演劇の鑑賞を続ける魅力の一つに、メタ化しすぎていない観客たちとともに時間を過ごせる喜びがある。大衆演劇では芝居の筋や舞踊ショーの演出はベタであればあるほど喜ばれ、会場が盛り上がる。ファン歴40年の阿部氏はこの感覚を「たとえば歌舞伎は、台詞もわけがわからなくて難しいですよ。だから気楽に観る感じでもない。それに比べると、大衆演劇は単純明快だから、頭を空っぽにして観ることができる。とにかく面白い、楽しい、それだけなんですよ¹⁰⁾」と述べている。大芸術としての歌舞伎や能などに対する小芸術としての大衆演劇の魅力、分かりやすさや俗っぽさ、そして世に連れ過ぎた演出の清々しさは重要な仕組みだ。軽音楽、ライトノベルの系譜に連なる軽演劇という名称がしっくりくることになる。

3. 解像度77による展示「山下茂の山あり谷あり」

3.1 第3回の展示を模索する

おしつけがましくない、軽芸術的見立てを検証するために筆者山貝はアートトリオでの作品制作・展示を続けている。2023年の6月から7月にかけて、解像度77による展覧会「山下茂の山あり谷あり」を開催した。この方式で実施する3回目の展示となるもので、2019年の第1回¹¹⁾、2022年の第2回¹²⁾の概要は過去の拙稿にその概要を記してある。この第3回の展覧会を準備するにあたって、本論文を共同で執筆している赤松氏が運営する、長野県茅野市のアノニム・ギャラリーで実施できないか相談を持ちかけ実現することができた。大枠構造はインスタレーションとし、その中でもメインで展示するのは写真作品とする。そのロケを県内各地の地域資源の再発見として魅力的な場所を探しB級なしつらえをし、モデルは清泉女学院大学の学生に依頼し撮影を進めていった。

3.2 展覧会概要

- ・ 展覧会名：山下茂の山あり谷あり
- ・ 主催者：解像度 77 www.instagram.com/kaizodo77/
大井川茂兵衛（おおいがわ・もへい）フォトグラファー，株式会社 Hi-Bush
木下光三（きのした・こうぞう）デザイナー，株式会社ズズサウルス
山貝征典（やまがい・まさのり）キュレーター，清泉女学院大学
- ・ 概要：空間全体を作品としてしつらえ体験するように鑑賞するインスタレーション
- ・ 会期：2023/6/10（土）から 7/2（日），12時から17時（最終日は16時まで）
水・木休み（ギャラリーに準じる）／入場無料
- ・ 会場：アノニム・ギャラリー 長野県茅野市湖東 4278 <http://anonymgallery.com/>
- ・ 作品制作および準備補助：清泉女学院大学人間学部文化学科学生有志
- ・ 関連イベント
6/10: ch.books CAFE による出張店：展覧会とイメージを合わせたメニューを提供
www.instagram.com/ch.books.cafe/
7/1.2: 屏風づくりワークショップ：実際に展示でも実践した
ダンボールによる屏風制作手法による造形体験



図 3 写真撮影のロケ地一覧および関連箇所

3.3 展示コンセプトと準備・構成

展覧会準備のミーティングを続けていく中で「山折り・谷折り」「山あり谷あり茂みあり」「山下清画伯」「短冊」「デュエット」「対」などのキーワードが出てきた。撮り続けているコンセプトに沿った写真や会場予定ギャラリーを照らし合わせ、空間のイメージを構成していった。今回の展示構成の核とした屏風のイメージも膨らませ、実際に制作するにあたっての問題点をクリアしていった。撮影写真を屏風化するにあたって各種実験をし、多様

な大きさや素材で制作しそのサイズ感をダンボールに当てはめ、また制作時の糊材との相性、立てた時の反りの実験などをくりかえしていった。さらに並行して写真撮影を長野県内各所で続けていった。湖でのわかさぎ釣りやボート漕ぎ、レトロなボウリング場など各所でのロケは、これまでの撮影実績やコネクションも生かすことができた。

展示空間の左右の部屋が白と黒の壁面で対であったことを利用し、ネガティブワードをカラフルな短冊に書き白い部屋へ吊るし、ポジティブワードを黒い用紙に書き黒い部屋へ吊るし、バランスを取った。床には銀色のエマージェンシー・シートを敷き詰め、屏風を含む全体の空間が反射・反転して見えるように構成した。この表現は今回の展示にあたってのフィールドワークで感銘を受けた、画家・山下清による貼り絵の代表作《長岡の花火》や《諏訪湖の花火》へのオマージュでもある¹³。搬入展示作業の最終段階で、イメージしていた通りに会場内に設置してみたところいまいち説得力がなかったことから、すべてその屏風の前後を逆にし、空間に入ったときには裏側が見えていて、会場奥に回り込んで玄関側を見ると作品の全貌が見えるようにしつらえていった。このことが功を奏してより画中画感が増し、フェイク感やB級感をさらに表現できる結果となった。

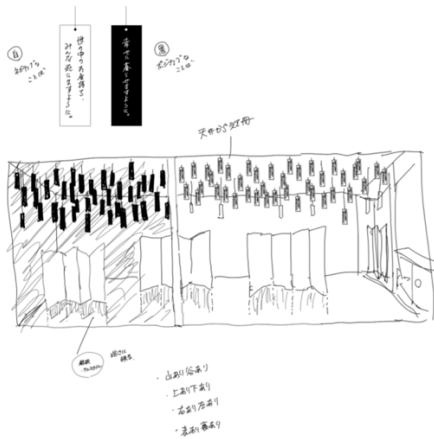


図4 展示イメージスケッチ (木下)

77 展 2023 茅野 屏風作品 ダンボールサイズの確認 改

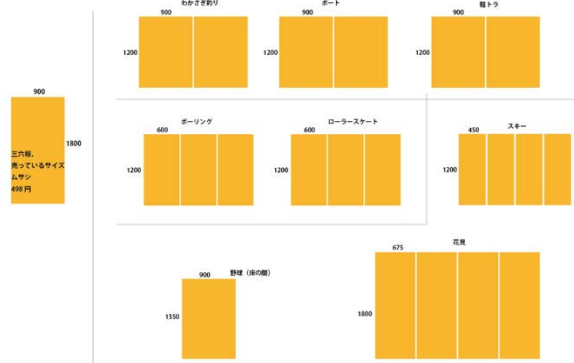


図5 屏風制作準備時の寸法図面 (山貝)



図6 写真撮影の様子, 2月厳冬期の霊仙寺湖でのわかさぎ釣りの現場



図7 野尻湖の休憩所に打ち捨てられていたエアホッケーを利用した撮影



図 8.9 完成形の写真作品：ボウリング場と花見



図 10.11 フライヤー：山おり谷おり線にそって折り目をつける则屏風状に自立



図 12.13 会場インスタレーション・ビュー

3.4 展示の総括と今後の展開

第2回解像度77展の最中に現れたB級という意識は、私たちのつくりたい空間や表現イメージにフィットするものであった。そして今回の第3回の展示をつくり出した振り返る中で「さびおま」とも出会い、画中画・劇中劇、メタ思考というキーワードも現れた。軽快な中にも複雑な入れ子構造を実現した世界観、またその元になっている大衆演劇そのものや鑑賞者のメタ感覚なども掘り下げ、2024年の第4回展へ向けて準備を進めていく。

4. おしつけがましくない芸術の性質とは

4.1 ローリング市場と仏教美学

環境音楽、街に設置されたパブリックアートとしてのヌードの銅像、昭和期に大量生産された青白食器、ゲーム音楽…これらは「おしつけがましくない芸術」というテーマでわ

れわれがこれまでにとりあげた事象である。日常風景のなかに溶け込みすぎて人々に認識されにくい、あるいは日常風景に溶け込むことを意図された創作物であるといえるだろう。赤松は日頃、アノニムギャラリーという場を開き、展覧会の開催やローリング市場というリサイクルショップのようなものを運営している。ローリング市場では、お客さまが持って来たものは何でも取り扱うという「ノンセレクト」のコンセプトを掲げ、古道具や工業製品、家電、誰かの手作り品、大量生産の衣服や食器など玉石混交、種々雑多なものが日々目の前を通り過ぎていく。人気の柳宗理のカトラリーも銀行などで配られるノベルティのペンも、何から何までところせましと並列されている。

そんななかで前々回の論文「その 1¹⁴」ではローリング市場にある青白食器をとりあげて、無価値とされたもの、とるにたらないもの、日常の断片にただ在るものを、個別具体の存在そのものに寄り添うことで、そのかけがえのなさを美学的体験として捉え直そうという試みを行った。筆者としては、ローリング市場で時折発生する「誰からも顧みられないもの」をなんとか価値付けようとする擁護運動であった。そこで提案したのは、目の前にあるものに対し価値判断をせずありのままを受け入れ、芸術的視点で眺めることで起こる認識のズレや変化を観察するというメタ認知の実践であったが、それは柳宗悦が晩年にたどり着いた、不二一元の美の境地と似ているのではないかと最近考えるようになった。つまり、美醜のような分別知に頼るのではなく、分別＝自力を捨てて、仏の導き＝他力によって美にいたるという柳が提唱した仏教美学はおしつけがましくない芸術を考える上で大きな足掛かりとなる¹⁵。



図 15 アノニム・ギャラリーのローリング市場

4.2 おしつけがましくない芸術の性質：他力性

改めて語意を確認すると、「おしつけがましい」という語の反語的用法である「おしつけがましくない」とは自分の意見を他人におしつけないという意であり、そこに芸術という語をつければ、自分の意見を他人におしつけない芸術ということになる。柳の仏教美学を借りれば、自分の意見を他人におしつける自我の強い芸術よりも、自分の意見をおしつけないおしつけがましくない芸術こそ美へいたるといえるかもしれない。そのように考えると、おしつけがましくない芸術が持つ性質として、「自我が弱い」、「他力」、「無私」といったキーワードが挙げられるだろう。

5. おしつけがましくない芸術の交差概念

5.1 おしつけがましくない芸術としてのシュルレアリスム

シュルレアリスムはダダイズムの流れを汲んで 1920 年代にフランスで起こった文学・芸術運動であり、超現実主義と訳される。シュルレアリスムといえば独創的で風変わりな作品イメージが流布しており、一見おしつけがましくない芸術とは結びつかないかもしれない。しかしながら、シュルレアリスムの表現は「自我の表出」ではなくむしろ「自力での表現をしないように他力を呼び起こす創作実験」であったという点で、おしつけがましくない芸術と接続している。

こと日本では、シュルレアリスムの作品は現実を超えた幻想の世界を表現しているというような誤解がなされているが、シュルレアリストの言う「超現実」とは決して幻想の世界ではなく、あくまでわれわれの生きる現実世界と地続きの世界である¹⁶。シュルレアリスムの思想によれば、われわれが生きている「現実」だと信じ込んでいる世界は主観の世界(自分が感じたり考えたりする世界)であり、主観を排した客観の世界(なにものかによって存在している世界)へ到達することで、より強度な現実である「超現実」がもたらされる。そのような考え方の上に立って、シュルレアリスムでとられた表現手法は自力を極力排して、他力(無意識や偶然性)を導き入れる創作実験が取り入れられた。自動記述(エクリチュール・オートマティック)、コラージュ¹⁷、フロッタージュ¹⁸、デカルコマニー¹⁹等、いずれも偶然あらわれる言葉や形を自分の意志に依らずに現出させ、作品化するものである。

アンドレ・ブルトンとフィリップ・スーポーの行った自動記述ではノートをひろげて、何も予定せずに言葉を並べていくという手法がとられた。自分で自分を制御せずに筆をひたすら走らせ、どんどんスピードを上げていくと、自分でもまったく思いもよらない言葉と言葉がつながりあい新しいイメージが浮かび上がってくる。あまりにも熱中しすぎるとゾーンに入り、狂気の状態に近づいてしまうようで、自我を排除しようとするあまり、自我の崩壊の危機が訪れるほどであったという。

あるいは、マックス・エルンストはコラージュの作品を制作している際、「既成の図版の X と Y を自分が主観的に結びつけたというのではなく、それらがおたがいに結びついてくる状況を自分が観客のように見た²⁰」と自分のアイデアによらない創作の在り方を述べている。実際シュルレアリスムの絵画を見ると、現実の具体的なイメージから乖離した抽象世界などではなく、現実と地続きの具象的な画像が広がっている。そして具象画でありながら現実ではありえないイメージが創出されている。新しい美の認識をもとめた前衛芸術の動きのなかでも、他力への扉をひらいた表現としてシュルレアリスムは固有の意義が認められる。

5.2 おしつけがましくない芸術としての民藝

民藝は「1926(大正 15)年に柳宗悦・河井寛次郎・浜田庄司らによって提唱された生活文化運動」であり、「名も無き職人の手から生み出された日常の生活道具を『民藝(民衆的工芸)』と名付け、美術品に負けない美しさがあると唱え、美は生活の中にある²¹」と提唱した。先に述べた仏教美学と同じく、民藝もまたおしつけがましくない芸術と様々な点で近似の視点を持つと考える。なかでもここで注目したいのは、柳の「工藝的なもの」の視

点であり、シュルレアリスムとはまた別のかたちの「無私」の芸術を想起させる。

「工藝的なもの」とは、例えば、バスの運転手のアナウンスにおける独特の抑揚ある言い回しであり、それは、発話という「本来は個人的な行為、『私』という領域・生活で行われる行為が、社会という『公』の場、他者と触れる場所で次第に削ぎ落とされ、リズムが煮詰まったもの、煮詰まって一つの特徴ある姿となったもの²²⁾であるという。つまり、繰り返し繰り返し行われることで自ずと工夫されたり個性が削ぎ落とされたり手慣れることでできあがっていく一つの型のようなものが「工藝的なもの」であるといえるだろう。ほかにも、「床屋の鋏の調子・線路工夫の掛け声・銀行員のお札の数え方・物売りの声・トランプが上手な人の切り方・肉屋の主人の包丁さばき・芝居や落語や相撲の看板の字・中世活版の字・新聞書体・大津絵・グレゴリオ聖歌・天台宗で行われる論議・茶道・能楽・武術……など²³⁾の例が挙げられていて、柳の「工藝的なもの」の視点が生活のすみずみに及んでいたことが分かり興味深い。

そして民藝を研究し自身も工藝店を営む高木崇雄の指摘によれば、「工藝的なもの」には「時間」が含まれているという。それは自らが繰り返し行うことで積み重ねてきた時間だけでなく、先人たちが積み重ねてきた時間も含まれ、またその時々場の条件なども含まれる。つまり、主体的な行動のなかに、客体的な要素が多分に含まれることで、普段の「私」=自我とはまた異なる行動様式が生まれる。高木は『『私』でありながら『私』を切り離すことなく共有できる『公』²⁴⁾』と表している。

そして、この「工藝的なもの」の視点はさまざまな事象に応用できるだろう。例えば、私自身運営しているギャラリーに立っていると、常連のお客さまとのやりとりなど、初対面の時から少しずつ関係性が出来てくるなかで相手のリズムや趣味趣向などが分かってくる。会話のやりとりが「工藝的なもの」となっていく。「私」を出すのではなく、かといって、主客という「公」の役割を演じるだけでもない、余分な緊張が削ぎ落とされて「工藝的に」対応することで気楽に時間を過ごすことができる。

6. リラックスした芸術の在り方

フランスの美術家であり、「アール・ブリュット」の概念を生み出したジャン・デュビュッフエは美術家としてのキャリアを本格的に始める前から、そしてアール・ブリュットの概念を思いつく前から、「普通の人」という思想を抱いていた。「普通の人」とはまさに普通に街にいる人のことで、彼らこそ理想的な平衡感覚を持ち、生活を営む力があり、その日常生活のなかにこそ芸術があると、普通の人を観察していた。デュビュッフエは街で出会った男たちの印象を次のように認めている。「私はシャールヴィルの床屋で話し合う消防士や肉屋そして郵便配達員といった若い男たちによく会ったものだった。私は彼らが本当にその場に馴染んでいると思う。彼らにとって物事はまったく難しいものではないようだ。彼らの話は楽しく確実であるように聞こえ、羨ましくなる。その上、彼らのとりとめのない会話に、より多くの生活やより多くの驚き、独創性、要するに、より多くの味わいがあることを感じる。はっきり言ってしまおう。より多くの芸術があるのだ。若い床屋の言葉には一彼の人生には一彼の頭には一多くの芸術が、より多くの詩があるのだ。どんな専門家の言葉よりも²⁵⁾」

デュビュッフエが街で出会った光景は、時代が変われど非常に身近なものとして想起さ

れる一場面であり，何ともリラックスした芸術の在りようである。美術館やギャラリーで多少の緊張のなか芸術を発表／鑑賞するという在りようとはまるで正反対だといえる。しかし彼はそこにこそ生の実感のようなものを感じ，美術館やギャラリーで出会うことのない新しい「美」を見出したのだろう。この，繰り返される日常風景のなかに芸術があるというデュビュッフェの視点は柳の「工藝的なもの」とも通じているし，おしつけがましくない芸術とも重なるところが大いにある。

7. 社会彫刻とおしつけがましくない芸術

ドイツの現代美術家ヨーゼフ・ボイスは，いかなる人間の営みも意識して行う活動であればそれは芸術であるとする「社会彫刻」の概念を提唱した。それは誰でもどんなささいな活動であっても未来に向けて社会を彫刻しうるし，しなければならないという主張であった。これはいわゆる絵画や彫刻などの既成の芸術概念に限定されることなく，私たちが生きている暮らしにも直結して応用できる概念であり，誰しもが芸術家でありうるという視点はおしつけがましくない芸術とつながるし，共感する。しかしながら，社会彫刻とおしつけがましくない芸術には違いがあるようにも感じる。それは社会彫刻が「意識して行う活動は芸術である」としているのに対し，おしつけがましくない芸術は「意識しないで行う活動もまた芸術である」という視点を持つと考えられるからである。それは無意識や偶然性を利用したシュルレアリスムの実験が含まれるだろうし，繰り返しによって「型」となった「工藝的なもの」も該当するだろう。およそ「自力」ではなく「他力」による芸術はここに含まれるであろう。自覚の有無にかかわらず，どんな人のどんなささいな所業であれ，芸術となる可能性を宿している。

8. おわりに

本論では軽芸術という視点や芸術における B 級感覚が持つ魅力，大衆演劇の特徴や入れ子状の劇中劇の魅力などを読み解いてきた。また柳宗悦の仏教美学，シュルレアリスム，民藝，社会彫刻との類似性や対比などから，おしつけがましくない芸術の性質としての他力性を顕示することを試みた。ほかにも家元制度や正調，限界芸術や超芸術トマソン，近年福祉施設で行われる癖や習慣を利用した作品づくりなども検討の範疇に入ってくると思われるので，今後取り組みたい。また実際に行うフィールドワークやアートプロジェクトにおけるおしつけがましきの発見や，運営するギャラリーで取り扱う作品，作家にもおしつけがましくない芸術に該当すると思われるものがいくつかあるので，引き続き事例調査も合わせて進めていきたい。本論で言及した解像度 77 による展覧会「山下茂の山あり谷あり」は「2023 年度 清泉女学院大学地域連携プロジェクト」の助成を受けて実施することができた。関係各位に御礼を申し上げる。

注

¹ Michael Jackson.(1992). Jam - Live in Bucharest (The Dangerous Tour). October 1st, 1992. @MichaelJackson, Retrieved December 26, 2023, from <https://www.youtube.com/watch?v=Hxgo-Qu-ZZE>

² 浦久俊彦 (2013) 『フランツ・リストはなぜ女たちを失神させたのか』新潮社

³ <https://www.tbs.co.jp/tbs-ch/item/d0054/> (2023/12/27 最終閲覧)

- 4 サラリーマン金融の略。主にサラリーマン（会社員）を対象に融資する金融業者を意味する。
- 5 庶民を対象とした演劇芸術の総称。剣劇，軽演劇，レビュー，ミュージカルなど，広く芸術性より娯楽性に重きをおいた演劇をさすが，その基準はあまり明確ではない〔精選版日本国語大辞典〕より。
- 6 鵜飼正樹「大衆演劇はグローバル化の時代をどう生き抜くか？」
『INTERCULTURAL 10 グローバル化するポピュラーカルチャーと国際文化学』p.83
- 7 里山社編（2016）「ドキュメンタリーの哲学（仮）」『日常と不在を見つめて-ドキュメンタリー作家 佐藤真の哲学』里山社，pp.294-295
- 8 本作品は2011年に中村獅童主演による舞台としてリメイクされた。
- 9 「勢揃い清水港」『淋しいのはお前だけじゃない 13話』より
- 10 「笑いあり涙あり，出会いあり。夫婦で旅役者を応援する40年以上の大衆演劇ファン75歳の生き甲斐」『tayorini 介護が不安な，あなたのたよりに』
<https://kaigo.homes.co.jp/tayorini/fan/012/>（2023/12/27 最終閲覧）
- 11 山貝征典（2020）「作品《解像度 77》信濃追分文化磁場油や「隠れ家プロジェクト」におけるインスタレーション展示」『清泉女学院大学人間学部研究紀要 第17号』清泉女学院大学
- 12 山貝征典（2023）「おしつけがましくない芸術・その2 —芸術における「おしつけがましくなさ」とは何か—」『清泉女学院大学人間学部研究紀要 第20号』清泉女学院大学
- 13 RPGゲーム「Undertale」のグラフィック表現からも示唆を得た。
- 14 山貝征典，赤松さやか（2022）「おしつけがましくない芸術-「日常」と「芸術」の境目を融解させるための創造的視点-」『清泉女学院大学人間学部研究紀要 第19号』清泉女学院大学
- 15 柳宗悦（1995）『新編美の法門』岩波書店
- 16 巖谷國士（1996）『シュルレアリスムとは何か』メタローグ
- 17 ばらばらの素材（新聞の切り抜き，壁紙，書類，雑多な物体など）を組み合わせることで，一つのイメージを構成する創作技法。collageはフランス語の「糊付け」を意味する言葉。
- 18 木の葉や木目や布地のような凹凸のあるものの上に紙を置き，上から鉛筆などでこすって画像を得る技法で，フランス語のfrotter（こする）に由来する。
- 19 紙と紙の間などに絵具を挟み，再び開いて偶発的な模様を得る技法で，フランス語のdécalquer（転写する）に由来する。
- 20 同注19，p.63
- 21 日本民藝館 <https://www.nihon-mingeikyokai.jp/about/>（2023/12/27 最終閲覧）
- 22 高木崇雄（2020）『わかりやすい民藝』D&DEPARTMENT PROJECT，p.106
- 23 同注25，p.106
- 24 同注25，p.113
- 25 赤松さやか訳，Jean Dubuffet.(1945).*Plus modeste. Prospectus et tous écrits suivants I*，Paris，Gallimard，p.91